

— ウズベキスタにおける「作文教育」についての一考察 —

- A STUDY ON "WRITING EDUCATION" IN UZBEKISTAN -



<https://doi.org/10.5281/zenodo.6653523>

亀田 敏之

東洋言語学科 日本語講師

Kameda Toshiyuki

Lecturer in Japanese, Department of Oriental Languages

キーワード：作文、原稿用紙、原稿用紙文化、作文の試験、字数制限、横書き、縦書き、ガラパゴス携帯

1、日本での「作文教育」

日本の小・中・高校における作文教育は、主に「国語」の教科の時間に行われている。私も30年間、日本の公立高校あるいは私立高校の国語教師を経験してきたが、授業中に書く作文は、そのほとんどが原稿用紙に書かせていた。たとえば自由に、自分のノートに書かせたり、あるいは罫線の入っていない普通の白紙のコピー用紙に書かせたという記憶がない。つまり「作文を書く」ということは、同時に「原稿用紙に書く」ということを意味しており、生徒や学生たちもそのことについて疑問に思ったことはないと思われる。

また、このことを傍証する資料には事欠かない。たとえばこの本(図1)は、高校受験の作文試験対策用の問題集だが、この中に載っているすべての作文例は、原稿用紙に書かれている。なぜならば、公立高校であれ私立高校であれ、日本の高校受験の「国語」の試験には、論作文の課題が必ずと言っていいほど出されており、(もちろん日本全国の高校入学試験をくまなく調査したわけではないが)おそらくその百パーセント近くが「原稿用紙」に書くことを条件として要求しているからである。つまり、日本の高校入試の「国語」で高得点を得ようとするならば、原稿用紙に作文を書く練習を積む必要があり、その入試対策の一環として、日ごろから「原稿用紙」に書くように心がけているのかもしれない。そしてこの「原稿用紙に書く」ということは、高校入試に限らず、大学入試の「国語」の試験にも取り入れられている。さらに誤解を恐れずに言えば、大学卒業後に受ける、会社の入社試験等にも取り入れられていると言っても過言ではない。

では、原稿用紙に作文を書かせる最大の理由は何か。

私見によれば、論作文の試験には必ず「字数制限」が設けられている。この作文の字数をカウントするためには、いわゆる400字詰め原稿用紙に書かせるのが一番分かりやすい。日本で販売されている市販の原稿用紙は、JISつまり日本工業規格によって20×20マスの400字と決められており、学校教育の場においても、この400字詰め原稿用紙が用いられている。(図2)また文字のサイズもマス目の大きさによって制限でき、論作文を採点する側にはとても便利である。もしこれが罫線も何もないただの白紙に書かせれば、受験生によって、小さい文字や大きい文字が現れ、あるいは不揃いの文字になり、

とても見にくい。つまり論作文の採点者の便宜を最優先にして、この原稿用紙に書かせるという日本の教育現場に広く見られる慣例が生まれたのではなかろうか。

2、ウズベキスタンでの「作文教育」

翻って目をウズベキスタンに転じると、一年にもならない、またこのサマルカンド国立外国語大学という限られた範囲での私の管見によれば、「作文」つまり日本語のライティングの試験は、普通の白紙に書かせている場合が多いように思われる。また学生や日本語科の教員たちも、そのことに別段疑問を感じていないように思われる。私もこの大学に来てから、ネイティブ教師ということで、作文の採点する機会が何度もあったが、渡された学生たちの作文は、すべて普通の白紙のコピー用紙に書かれていた。

その最大の理由は、言うまでもなく、この国には、日本のように文章を「原稿用紙」に書く習慣がなく、したがって街の文房具屋に行っても、「原稿用紙」なるものが売られていない（存在しない）ことによる。「文化の違いだ」と言ってしまえばそれまでだが、逆に日本の原稿用紙に書く習慣が、いかに世界的に見て特異なものであるかを痛感した。（私はこの国に来る前は、10年近く中国の大学で日本語を教えてきた。中国は日本同様、原稿用紙に書く習慣が今でも続いており、大学内の購買部には、普通に原稿用紙が売られていて、授業の際にはそれを配って作文を書かせていた。（図3）また学生から、「原稿用紙に作文を書く」ことに対して疑義が出されたことは一度もない。学生たちは皆、当然のこととして、日本語の作文を原稿用紙に書いていた）

つまり、私の（日本語）教師としての経験が、日本、中国そして現在のウズベキスタンなので、どうしても日中の学校での経験が思考のベースになってしまい、「作文は原稿用紙に書くもの」という先入観から抜け出せないでいた。だからこの国に来て、学生たちが日本語の作文を普通の白い紙の上に書いているのを見て、「日本語学科の学生なのに、どうして原稿用紙に書かないの？」と疑問に思った。でも先ほども言ったように、世界的に見て、文章を学校教育の場で原稿用紙に書かせているのは、世界広しと言えども、中国と日本だけなのではないだろうか。

3、原稿用紙に書かせる必要があるのか？

そこで、「作文」の授業を始める前に、原稿用紙を使うことの意味（意義）についての話から始めた。海外で日本語を習う学生たちの動機やきっかけは様々だろうが、やはり大学の外国語学部（中国では「外国語学院」）の中で日本語を習う学生である以上、日本の（広くは）書写文化に対する理解は必要だと思われる。「ウズベキスタンでは原稿用紙に文章を書く習慣がない。だから原稿用紙に書くことには意味がない」と考えるのは、あまりにも短絡的過ぎるだろう。

たとえば日本語学科の学生は、今でも日本で広く見られる「縦書き」の文章スタイルとかに馴染むことは必要なことだと思う。（おそらく2022年の今日でも、出版される書籍の半分以上は縦書きのスタイルになっていると思う）大学の授業で「横書き」ばかりで日本語を書いている学生が、日本に来て「縦書き」の文章に接したときの戸惑いは大きいだろう。日本人で、横書きに組まれた文章より、縦書きの文章の方がずっと読みやすいと感じるのは、私一人ではないだろう。

つまり、海外で日本語を学ぶということは、広くは日本の（書写）文化に対する理解を持つということと同義であり、日本人が「作文は原稿用紙に書くのが当たり前」とい

う考えを学校教育の中で培っているという事実がある以上、その良し悪しは別にして、原稿用紙の使い方やそのルールを知ることは、無駄ではないように思う。また卒業後、日本に留学したり、日本で就職したりする学生には、いつなごとき、入社試験や大学院の入学試験で、「原稿用紙」に、たとえば自己紹介や自己アピールの文章を書かされることがあるかもしれない。そんなときに、平素から原稿用紙に馴染んでいる中国の学生は、なんの違和感もなく、ずっと原稿用紙に向かえるだろう。しかし、授業の中で、日本語の作文は何回も書いていたとしても、それを「原稿用紙」に書いたことのないウズベキスタンの学生の戸惑いは、とても大きいだろう。

以上のような話を「作文」の授業の前に、学生たちに諄々と説いて聞かせてから、授業を始めている。

4、最後に — 原稿用紙を使った作文授業について

日本、あるいは中国において普通に行われている「作文授業」が、原稿用紙に書かせるという点において極めて特異なものであることを述べてきた。また原稿用紙を使って作文を書くことの必要性、あるいは利点等についても言及した。さらに深く追究すれば、原稿用紙の使用の有無は、日本語、あるいは中国の文字の字形とも関係がありそうである。

一時期、日本の携帯電話は「ガタパゴスケータイ」、略称「ガラケー」と呼ばれた。ガラパゴスというのは、東太平洋の赤道付近にある島々の呼称だが、この島の生物が大陸から隔離されて独自の進化を遂げたことになぞらえ、そう名づけられたらしい。つまり日本の携帯電話は、国内市場だけを考慮して開発改良されてきたので、海外では売れなくなってしまったことを揶揄して付けられた名前だそうだが、日本の「原稿用紙文化」も、それと似たようなところがあるのかもしれない。

私自身、日本の中・高校の国語の教師をやってきて、作文を原稿用紙に書かせることについて、一度たりとも疑問に思ったことはなかった。むしろそれは当然のことで、他の同僚の教師や学生たちから、それを疑問視するような意見を聞いたこともない。そして、退職後、中国の大学で日本語を教え出してから、「写作」（日本語の「作文」に当たる言葉）の授業でも、作文は毎回「原稿用紙」に書かせていた。また中国の大学から渡された「写作」の教科書には、必ず最初に「原稿用紙の使い方」の説明が記載されていた。（図4）また極端な例かもしれないが、原稿用紙自体がテキストの本文に印刷された「写作」の教科書を使っている大学もあった。（図5）

日本の学校、そして中国の大学と、ずっとそういう「原稿用紙文化」に馴染んできた人間が、このウズベキスタンに来て、「原稿用紙」の存在自体を知らない学生たちを見て、最初は正直とても驚いた。しかし繰り返しになるが、世界的なグローバルな視点に立てば、この広い世界で、今なお「原稿用紙」に作文を書かせているのは、日本と中国ぐらいだと思う。例えば英語圏の人間から見れば、作文を書くのに、どうして原稿用紙なる専用の紙が必要になるのか、逆に不思議に思うだろう。原稿用紙の使い方のルールに習熟し、間違いなく原稿用紙のマス目に文字を埋められることに、いったいどれだけの意味や意義があるのか、はなはだ疑問に思うだろう。

「原稿用紙文化」に首までどっぷり浸かった私にとって、ウズベキスタンにおける「作文教育」は、ようやくその緒に就いたばかりである。